

寺町廃寺の建築学的考察

奈良女子大学・藤田盟児

1. 古代寺院の概要

- 558年に造営が開始された飛鳥寺が、遺構として確認できる最古の寺院。
- 四天王寺式と呼ばれる塔を中心としたは、7世紀初頭に建設された斑鳩寺（若草伽藍）や四天王寺で、飛鳥時代末期に起工され、白鳳時代に完成した山田寺が最後。
- 韓国では6世紀前半の百濟の軍守里廃寺や6世紀後半の定林寺、553年創建の新羅の皇龍寺など。
- 645年の大化の改新によって始まった白鳳時代は、仏像を安置し儀式を行う金堂の意義が増大し、塔と金堂を並べる伽藍配置（塔が左側にあるものを法隆寺式、右側にあるものを法起寺式、金堂と塔が対面するものを觀世音寺式と呼ぶ）になる。
- 7世紀末期の天武・持統朝になると、金堂が伽藍の中心となり、682年に金堂前に塔を2基を建てる本薬師寺を起工。韓国でも679年創建の四天王寺を始めとして、統一新羅時代に多い。
- 8世紀の奈良時代になると、塔は回廊外へ出され、金堂と前庭からなる儀式空間を中心とした伽藍配置になり、儀式を司る僧侶の場として講堂や僧坊も重視されていく。平城京に建設された大安寺、興福寺、元興寺、薬師寺の四大寺と、その集大成としての東大寺。

つまり、寺町廃寺が採用する法起寺式は、遅れて仏教を受容したわが国が、先進国に追いつこうとした7世紀の政治的背景と、仏教建築の中心が塔から金堂へ変化していった白鳳時代の仏教の意義を反映した遺跡。

2. 法起寺式の寺院

- 7世紀後半に全国で500箇寺を数えるほどに急増した地方寺院は、基壇をもつ瓦葺の建築で構成される七堂伽藍が多いが、中央で壮大な伽藍が建設される8世紀になると地方では堂塔が1棟しかない小規模寺院が多くなる。つまり、8世紀には権力が中央集中される。
 - 確認された古代寺院175例中では、法起寺式60例、四天王寺式と法隆寺式がそれぞれ30例ほど。
 - 表1は、7世紀後半に限定し、かつ地形等からの推測に過ぎない事例も別にして、遺構として法起寺式であることが確認された28例。
- 濃い網掛け：遺構の検出が一部で伽藍の配置計画が検討できないもの。形式名になった法起寺も、金堂や講堂の規模が不明瞭で、配置計画を検討できない。

薄い網掛け：金堂と講堂が南北に並び、塔だけ東にずれているので、当初は金堂と講堂のみの伽藍で後に塔が建てられた金堂先行型の法起寺式と、中軸線が金堂に近く、講堂も金堂側に寄っているので、金堂重視型といわれる法起寺式。法起寺式とされる寺院の約半数は、実は金堂を重視した伽藍配置で、7世紀後半の金堂重視の傾向が、法起寺式とされる中に出現している。

つまり、金堂と塔を対等に併置した寺町廃寺の類例は、表1で白地のまま残された8例のみ。

3. 伽藍の中軸線について

- 山王廃寺（群馬県前橋市）は、金堂と塔の建物の中心を2分割する位置に中軸線が通ると推定しているが、講堂の東西長を発掘で確認した範囲を超えて延長しており疑問。
- 弥勒寺跡（岐阜県関市）も同上に推定しているが、中軸線の根拠となる南門、中門、講堂の位置や規模が不明で根拠が不確か。
- 穴太廃寺（滋賀県大津市）は、金堂と塔の向かい合った外壁の真ん中を中軸線が通るとする。これは法隆寺と同じ。ただし中軸線の根拠である講堂が8世紀に建てられた可能性があるので、8世紀の計画である可能性がある。
- 大寺廃寺（鳥取県伯耆町）は、推定されている講堂の中軸線は、金堂と塔の建物の中心の中点でも、基壇間の中点でもない位置を通り、穴太廃寺と同じかもしれない。しかし、講堂の発掘範囲が狭く不明確。
- 石井廃寺（徳島県石井町）は、金堂と塔の礎石の残りが良く、西面回廊と金堂の基壇の距離が6.3mと寺町廃寺に近いので、同類の伽藍配置であった可能性があるが、東面回廊や中門、講堂が検出されていないので中軸線を推定できない。
- 郡里廃寺（徳島県美馬市）は、東西回廊が検出されており、それぞれと金堂・塔との距離が寺町廃寺とほぼ同じであることから、同じ伽藍配置であった可能性が高いが、講堂や中門が未検出で未確定。

つまり、法起寺式の伽藍配置の設計方法を詳細に明らかにできる遺跡は、寺町廃寺の他にない。

表1、7世紀後半の遺構が確認された法起寺式寺院一覧

番号	建立時期	寺院名	基壇形式	金堂		塔		講堂		回廊ほか		中軸線
				遺構状況	基壇規模 (内は建物規模)	遺構状況	基壇規模 (内は建物規模)	遺構状況	基壇規模 (内は建物規模)	遺構状況	基壇規模 (内は建物規模)	
1	7世紀第3四半期	下總龍角寺廃寺	不明	基壇のみ	15.65×12.42m	心礎と基壇	9.1m	不明		不明		金堂と塔の心々距離は33.94m
2	7世紀第4四半期	下総木下別所廃寺	不明	基壇のみ	13×10m	基壇のみ	8m	地業あり	18.6×13.5m	不明		不明
3	7世紀後半	上野山主廃寺	切石積	南辺のみ不明	22.0×16.4m	心礎のみ	13.6m 高0.6m以上	基壇土のみ	31.0×24.5m	回廊を東西南で検出。 中門不明。		回廊との距離から金堂と塔の中心間の中央と推定(しかし1尺ずつれている)。
4	7世紀後期	駿河尾羽廃寺	切石積	基壇のみ	18.6×14.6m	不明		基壇土のみ	23×17.2m	金堂の東南に中門		金堂の背後に講堂。
5	7世紀後半	甲斐寺本廃寺	不明	地業のみ	18×10~12m	心礎ほか	5.4m	溝のみ	平行18m	参道らしき石列		不明。
6	660-70年	尾張東畠廃寺	不明	地業のみ	16.5~17.0×15.5m	地業のみ	7.5m	礎石1個	不明	不明		不明。
7	660-70年	加賀末松廃寺	不明	雨落溝のみ	19.8×18.4m	心礎のみ	(3.6m方3間で10.8mと推定)	無		土壠。東西間78.4m。 塔心と東土壠の距離17.9m。.		東西土壠の中軸は金堂基壇上を通る。金堂と塔の基壇間は6.6m。
8	7世紀末期	飛騨杉崎廃寺	乱石積	二重基壇 残存高0.4m	13.5×10.8m	二重基壇	8.1m	二重基壇	15×10.2m (偶数柱間)	中門		塔は、中門・金堂・講堂の中軸線から東へ張り出す。
9	7世紀後半	美濃赤勒寺跡	石積	礎石8個	14.88×12.42m (10.9×8.18m)	礎石4個	11.5m (6.36m 7尺 3間) 高0.9m	基壇のみ	24m×14m (5間4面、母屋10尺8寸)	東西回廊を確認。講堂の南端間に取り付く。		金堂と塔の中心間の中点を講堂の中軸線が通るとされる。
10	7世紀末期	若狭興道寺廃寺	不明	基壇北側のみ	17.8×14.8m	底部のみ	12m (中12尺脇8尺)	無		不明		不明
11	7世紀後半	近江穴太廃寺	瓦積	基壇のみ	22.14×18.72m	基壇の一部のみ	13.32m	乱石積	27.91×15.44m (3間13尺脇12尺) 深間10尺脇9尺)	西面回廊の一部 金堂・塔の基壇間距離 10.8m		講堂の中軸線は金堂と塔の建物心または基壇の中点ではない。
12	7世紀後半	山城大宅廃寺	瓦積	基壇東側一部 高0.2m幅1m の下成基壇有り	不明	基壇西側一部	不明	乱石積	26×16m (22.8×12m) 5間4面	築地のみ		金堂と塔の基壇間約8m。
13	670年頃	山城高麗寺	瓦積	西側欠 残存高0.8m 36枚の平瓦積 復原高1.1m	16.0×13.4m (身舎6.96×4.24m 全体11.7×9.0m)	瓦積基壇の裏石 は50×30×20cmの塊 復原高1.5m	12.7m	粗い瓦積 礎石2個 復原高0.8m	23.7×19.5m (梁間12.5尺のほかは13尺)	北辺以外は不明瞭 金堂と塔の基壇間8.27m。 講堂は金堂側に寄る。		不明瞭。
14	7世紀後半	山城久世廃寺	瓦積	残存高1.14m	26.7×21.3m	残存高1.1m	13.4m (6.3m)	身舎礎石 庇櫛立	23.5×13m (21×10.5m) 5間4面	東面回廊のみ確認。 南と東の築地も。		不明瞭。金堂と塔の基壇間8.9m。講堂は方位軸が異なり金堂寄り。
15	金堂538年 685年再開	大和法起寺	瓦積(推定)	西面の溝のみ	16.05×12.42m	建築あり 復原基壇高 1.4~1.75m	11.65m	北面溝のみ				金堂が規模・向き不明で中軸線との関係不明。
16	7世紀後半 8世紀後半再建	大和長林寺跡	瓦積	再建金堂	16.8×13.6m (11.8×9.6m)	心礎あり	不明	地業・堀形のみ	20.5×14.4m (17.5×10m) 5間4面	不明		再建により不明
17	7世紀後半	紀伊名古曾廃寺	不明	地業のみ	15×12m	心礎あり	9m	不明		不明		不明
18	7世紀後半	紀伊佐野廃寺	不明	雨落溝のみ	15×13.5m		12m	基壇の南東西のみ	24×15m	不明		塔は金堂の9m東で、講堂は金堂に寄っている。
19	7世紀第3四半世紀	美作大瀬廃寺	乱石積	礎石8個	不明	心礎と移動した 礎石数個	10.8m	掘立柱	不明	南門は3間2間の掘立 南門より決まる中軸線は金 柱建物。南築地と塚。		
20	7世紀後半	備後寺町廃寺	塔積	基壇・階段 残存高0.8m	15.74×13.40m	心礎・基壇・階段 残存高1.0m	11.14m	礎石1個・階段 残存高0.7m	25.1×14.7m (身舎11.12.14. 12.11尺脇8尺)	東西北回廊確認。		金堂と塔の建物間の中点を 講堂の中軸線が通る。
21	7世紀後半~ 8世紀初期	備後宮の前廃寺	塔積	地業のみ	23.5×15.5m	基壇化粧と堀形	12.6m	不明		不明		不明。
22	7世紀末期	因幡土師百井廃寺	乱石積	基壇のみ	基壇19×16m	礎石17個完存 河原石と瓦化粧 軒出3.8m	14m (6.4m方3間)	礎石4個	29×15m (6間4面、中央2 間11尺、他10尺)	中軸の9.8m東に中門 雨落溝を検出。		金堂と塔の基壇間の中点を、 講堂の中軸線が通ると されている。
23	7世紀後半	伯耆大寺廃寺	瓦積	基壇のみ	13.66×11.88m	基壇と礎石のみ	11.9m	基壇南西面を 確認	28.18×約17m	回廊の南西角で礎石8 個。講堂中央部に取り 付く。		講堂の中軸線は、金堂と塔 の中心の中点とも、基壇間 の中点とも一致しない。
24	7世紀末期	伯耆大原廃寺	不明	基壇東辺化粧抜 取りのみ	東西17.0m	心礎と基壇北辺	11m	掘立柱	19.5×13.4m (14.3×9.6m)			金堂と講堂が南北に並ぶ。 塔は4.5mで近接。
25	7世紀末期	岩見下府廃寺	塔積	基壇土のみ 残存高0.56m	15.22×11.96m	心礎と礎石2個 残存高0.62m	13.26m (7.2m 8尺等間) 階段幅2m 3段	無		不明		金堂と塔の基壇間は6.94m と近接。
26	7世紀後半~ 8世紀初期	讃岐白鳥廃寺	不明	未発掘		心礎のみ	12.3m 高1.2m	不明		不明		不明。
27	7世紀後半~ 8世紀前半	阿波石井廃寺	不明	礎石28個完存 高1.0~1.55m	約14.0×12.1m (9.4×7.25m)	心礎と礎石10個	10.0m (5.38m)	不明		金堂基壇西端から 6.3mに西回廊あり		建物の中心の中点と推定している。
28	7世紀後半	阿波郡里廃寺	不明	地業のみ	15×11.2mと推定	基壇と礎石2個	12.1m (6.42m)	不明		回廊は金堂の西方7m と塔の東方約8m		金堂と塔の回廊との距離 は、法隆寺に似た違いがある。

4. 伽藍配置の復原

- 寺町廃寺では、金堂と塔の建物の中心を結ぶ線の中点（建物間中点）は、講堂の中軸から推定した伽藍の中軸線から西へ60cmずれている。
 - 金堂と塔の基壇同士の中心（基壇間中点）は、講堂の中軸から推定した伽藍の中軸線から東に40cmずれている。
- 以上から、講堂の中心線は、法隆寺や穴太廃寺のように、金堂と塔の外壁間の中点を通っているのではないかと考えるのが適當。

法隆寺では、金堂がある東側を、回廊の長さを1間長くすることにより、塔より平面規模が大きい金堂と回廊の間が狭くなることを解消しているが、寺町廃寺も同様。

このように寺町廃寺は、法隆寺の西院伽藍に匹敵する緊密な景観を形成していたと考えられる。このことから、金堂と塔の外壁の位置も推定できるのではないかと考えた。

- 金堂と講堂の外壁位置を、未知数Xを使って表す。金堂の外壁からの基壇の出をXmとする。塔の外壁からの基壇の出は、Xより小さいが普通なので、A<1とすると、AXmと表せる。
- ここで、基壇同士の距離をLmとすると、基壇の間の中点は基壇端より1/2Lmにあり、それが上記のように講堂から推定される中軸線よりも東に40cmずれていたので、これを代入すると、1/2Lm+Xm+0.4m = 1/2(L+X+AX)という方程式が得られる。
- 方程式を整理すると、 $X(1-A) = 0.8m$ となる。したがって、金堂の基壇の出Xと、金堂と塔の基壇の出の比率Aは、一定の関係性があり、XとAの両方が上記の式を満たす場合でないと、伽藍配置と適合しない。
- 金堂の基壇の出Xは、表2をみると、裳階がない場合は2m以下、裳階がある場合は裳階を含めて3m以上。
- かりに金堂に裳階がなかったとすると、Xは1.7m程度で、1-A=0.8/1.7になるので、A=約0.53となり、塔の基壇の出AX=0.9mになるが、そのような塔は表3のように実在しない。
- そこで金堂には裳階があったとして、基壇の出Xを3.5mと仮定すると、1-A=0.8/3.5になるので、A=0.77となり、塔の基壇の出AXは2.7mになり、表3のように法起寺、奥山久米寺、賞田廃寺東塔などの類例がある。

表2 飛鳥・白鳳時代の金堂の平面規模

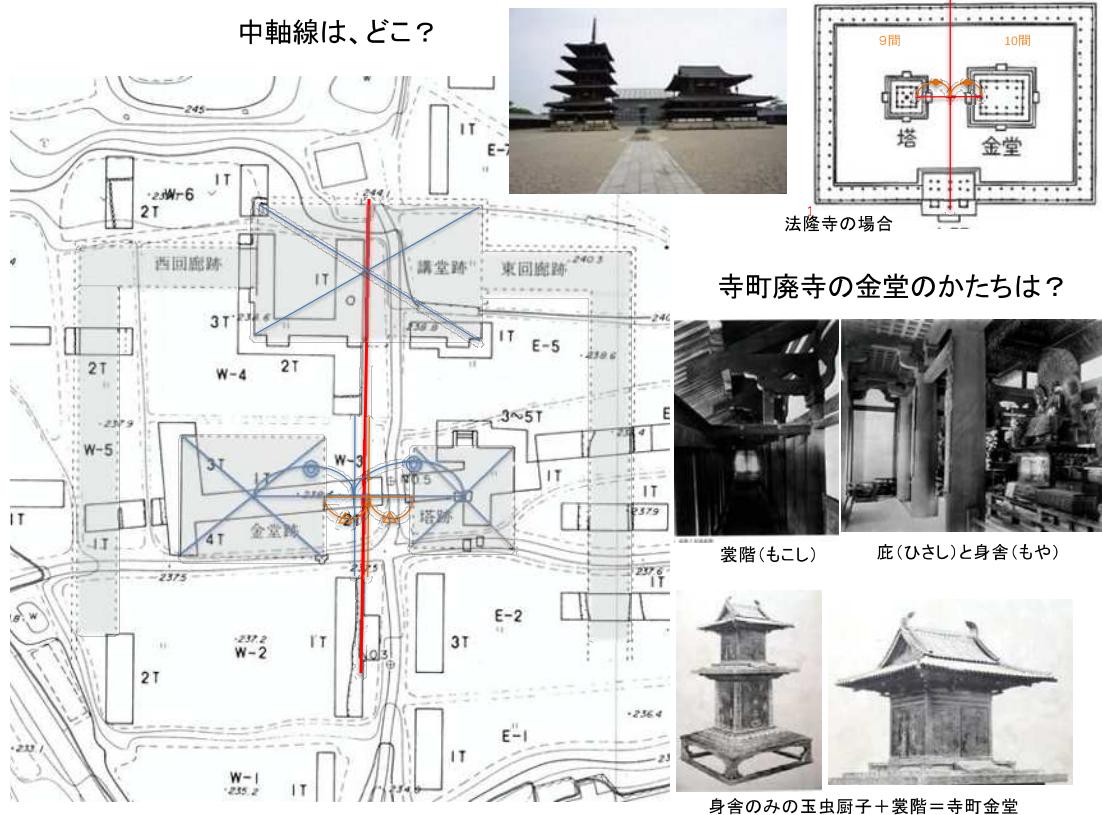
	建物幅(m)	基壇幅(m)	基壇の出(m)
法隆寺	13.99	23.63	4.82
南滋賀町廃寺	13.32	22.72	4.7
高麗寺	6.96	16	4.52
飛鳥寺中金堂	13.32	21.21	3.945
山田寺	14.52	21.6	3.54
川原寺中金堂	16.75	23.63	3.44
本薬師寺	22.7	29.5	3.4
中宮寺	13	17.3	2.15
川原寺西金堂	17.85	21.81	1.98
崇福寺小金堂	8.18	11.6	1.71
賞田廃寺	12.15	15.5	1.675
飛鳥寺東金堂	16	18.78	1.39
檜隈寺	13.92	16.35	1.215
野中寺	12.14	13.63	0.745

※『東アジア古代寺址比較研究(II)-金堂址編-(日本語版)』奈良文化財研究所、2015、「表4. 金堂の平面比較表」より作成。2重基壇のものは上成基壇で検討。

表3 飛鳥・白鳳時代の塔の平面規模

	建物幅(m)	基壇幅(m)	基壇の出(m)
尼寺廃寺	7.14	13.8	3.33
山田寺	6.52	12.85	3.17
本薬師寺西塔	7.2	13.5	3.15
法隆寺	6.35	12.35	3
海会寺	7.2	13.2	3
安部寺	6.36	12.1	2.87
郡里廃寺	6.42	12.1	2.84
禪寂寺	6.4	12	2.8
奥山久米寺	6.6	12	2.7
法起寺	6.42	11.65	2.62
賞田廃寺東塔	6.9	12.1	2.6
西条廃寺	6	11	2.5
和田廃寺	7.2	12.2	2.5
西山廃寺	5.2	10	2.4
繩生廃寺	5.4	10.2	2.4
鳥阪寺	4.54	8.66	2.06
賞田廃寺西塔	7.26	10.8	1.77
望徳寺	4.95	8.3	1.675

※『韓中日 古代寺址比較研究(I)-木塔址編-(日本語版)』奈良文化財研究所、2017、表1「時代別の韓国、中国、日本の木塔址の平面比較表」より作成。2重基壇のものは参考までに法隆寺のみ掲載。

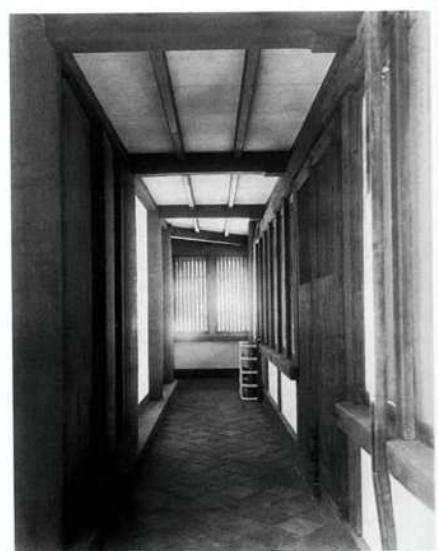
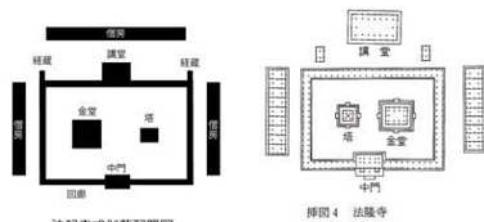


- ところが金堂と塔の基壇の出を前述のように3.5mと2.7mにすると、基壇規模が金堂で15.74×13.40m、塔で11.14×11.14mであるから、建物の規模は金堂が8.74×6.40m、塔が4.14×4.14mになり、表2で分かるように金堂としては最小規模で、表3で分かるように塔には類例がない。
- そこで、基壇の出をより小さく設定する条件が必要となり、表3より寺町廃寺の塔と同程度の11m前後の基壇規模をもつ法起寺の2.62m、西条廃寺の2.5mを参考にして、塔の基壇の出AX=2.5mとすると、塔の幅は6.14m（20.75尺）となり、初重の1辺の長さは21尺前後と18尺前後の2段階に分かれていたとされる飛鳥・白鳳時代の塔として適当な値になる。
- そこで、塔の平面は、標準的な7尺×3間=21尺であったとする（法隆寺、滋賀の崇福寺、鳥取の斎尾廃寺、多賀城廃寺などと同等の上級の塔であったことを意味する）と、AX=2.46mになり、これとX(1-A)=0.8を連立方程式として解くと、A=0.7546なので、金堂の基壇の出X=3.26mとなる。
- このとき金堂の規模は、裳階を含めないと桁行9.22m(1尺297mmで31尺)×梁間6.88m（同23.15尺）となり、表2に示した高麗寺の金堂に近くなる。高麗寺金堂は基壇の葛石に博をつかう点でも寺町廃寺に類似する。
- 高麗寺の金堂は、3間×2間（6.96×4.24m）の身舎に、幅2.42mの裳階を付けた平面形式で、いわゆる庇が無い。裳階も含めた規模は、5間×4間（11.7×9.0m）。
- 寺町廃寺の金堂も、庇が無く身舎に裳階を直接取り付けた形式として復原すると、身舎の桁行と梁間は31尺×23尺になるので、高麗寺金堂よりも1辺が3mほど大きく、法隆寺金堂の身舎（32×21.6尺）とほぼ同じ。

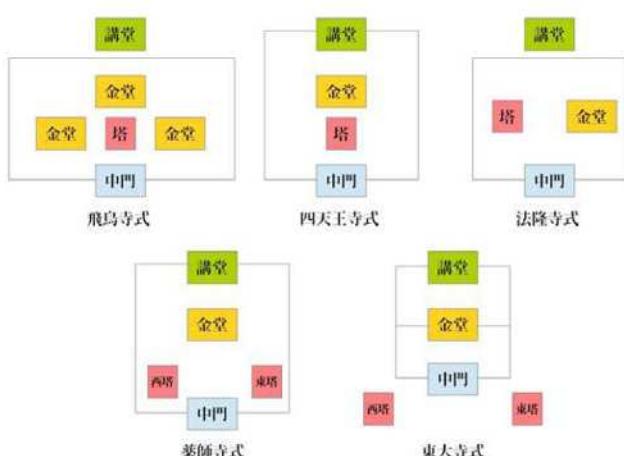
このような形式の金堂は、古代には実は多かったのではないかと思われる。表1で金堂の基壇規模が判明している25例をみると、法隆寺金堂と同等の20mかそれ以上は5例のみで、法起寺も含めて16例は寺町廃寺金堂に近い13~17mに収まっている。身舎・庇・裳階があるためには基壇幅が20m以上必要なので、この16例は庇か裳階がなかったと考えられる。そのいずれかは、礎石の規模・形式や伽藍配置との関係から再考しなければならない。なお、この形式は朝鮮半島では後世まで継承されており、1651年建造の麻谷寺大雄宝殿などがある。

5. 金堂と塔の形態

- 庇がないことから屋根形式は、切妻造。身舎が3間×2間で切妻造の例は玉虫厨子がある。
- 白鳳時代までの身舎だけからなる金堂は、僧侶が入ることができる裳階を、仏像を安置する厨子のような身舎の周囲に付加した形式であった可能性がある。
- 金堂と塔の基壇の高さは、共に求めた基壇の出の0.55倍であり、相似形。これも景観を重視した設計の証。
- 塔の階段は、基壇が低いにもかかわらず金堂の階段と同じ位置まで出すので、勾配が緩い。これも使い勝手より景観を重視した証。



法隆寺金堂の裏階



古代寺院の伽藍形式